

地域社会に貢献する愛される牧場をめざして

有限会社小田切牧場（肉用牛一貫経営・長野県東御市）

地域の概況

有限会社小田切牧場のある東御市は、長野県の東部に位置し、北は上信越高原国立公園の浅間連山を背にし、南は蓼科、八ヶ岳連峰の雄大な山並み、島崎藤村が詩に詠んだ千曲川と鹿曲川の清流が織りなす豊かな風土と歴史に恵まれている。

当市の平成29年度の農業産出額は49億円で、作目別の比率は、果樹33%、水稻23%、野菜22%、畜産11%となっている。様々な農作物が育まれ、巨峰に代表されるぶどう、八重原米、生産量日本一を誇るクルミ（シナノグルミ）など生産品目は多岐に及んでいる。特にぶどうでは、地域の風土がワイン生産の適地であることを活かし、新たなワイン産地としての振興も図られている（千曲川

ワインバレー構想）。

市内には酪農が6戸で160頭、肉用牛が8戸で900頭飼育されており、地域の畜産を支えている。



小田切牧場のスタッフ（左端が経営主の小田切隆治さん）

（表1）経営・活動の推移

年次	飼養頭羽数	経営・活動の内容
昭和31年	ホル雌肥育 5頭	創業者が中野市にて畜産を始める
昭和60年	ホル雌肥育 400頭	長野県東部町(現東御市)に東部牧場を開設
平成2年11月	中野牧場 ホル雌肥育200頭、東部牧場 ホル雌肥育200頭	中野市内にスーパー新鮮屋オープン
平成6年	中野牧場 F1肥育200頭、東部牧場 和牛/F1肥育400頭	中野市小田中地区に新中野牧場を開設(これに伴い、立ヶ花牧場閉鎖)
平成8年4月	中野牧場 F1肥育200頭、東部牧場 和牛/F1肥育400頭	農事組合法人 北信堆肥センター設立
平成9年6月	中野牧場 F1肥育200頭、東部牧場 和牛/F1肥育400頭	農事組合法人 えぼし湯の丸高原設立
平成16年6月	中野牧場 和牛/F1肥育400頭、東部牧場 和牛/F1肥育400頭	有限会社 小田切牧場設立(個人経営から法人組織へ移行)
平成19年11月	〃	長野県畜産共進会において農林大臣賞受賞
平成22年	〃	本社事務所完成
平成23年	〃	東部牧場の肉牛が全共長野県代表牛に選抜される
平成31年	中野牧場 和牛肥育250頭、F1肥育100頭 東部牧場 和牛肥育400頭、F1肥育100頭	農場HACCP認証

(表 2) 経営実績 (平成 30 年度)

経営の概要	労働時間 (畜産)	家族・構成員		4,800 時間		
		雇用・従業員		33,600 時間		
	<労働従事人数 (家族・構成員) >			2 人		
	<労働日数/1 人 (家族・構成員) >			300 日		
	労働力員数 (畜産・2000hr換算)	家族・構成員		2.4 人		
		雇用・従業員		16.8 人		
	成雌牛平均飼養頭数			50.0 頭		
	年間子牛分娩頭数			45 頭		
	肥育牛 平 均 飼養頭数	肉用種		650 頭		
		交雑種		160 頭		
乳用種		頭				
年 間 肥育牛 販売頭数	肉用種		330 頭			
	交雑種		120 頭			
	乳用種		頭			
所 得 率				6.6 %		
生産性	繁殖	成雌牛 1 頭当たり年間子牛分娩頭数			0.9 頭	
		平均分娩間隔			13.0 カ月	
	肥育 (品種・肥育タイプ)	(黒毛和種雌若齢)	肥育開始時	日 齢	280 日	
				体 重	260 k g	
			出荷時	日 齢	900 日	
				体 重	700 k g	
			平均肥育日数			630 日
			販売肥育牛 1 頭 1 日当たり増体重 (DG)			0.70 k g
			対仕向事故率			1.0 %
			肉質等級 4 以上格付率 ※			80.0 %
			もと牛 1 頭当たり導入価格			580,000 円
			もと牛生体 1 kg 当たり導入価格			2,230 円
		(黒毛和種去勢若齢)	肥育開始時	日 齢 (月齢)	280 日	
				体 重	290 k g	
			出荷時	出荷時	900 日	
				出荷時生体重	750 k g	
			平均肥育日数			620 日
			販売肥育牛 1 頭 1 日当たり増体重 (DG)			0.70 k g
			対常時頭数事故率			1.0 %
			肉質等級 4 以上格付率 ※			90.0 %
	もと牛 1 頭当たり導入価格			680,000 円		
	もと牛生体 1 kg 当たり導入価格			2,345 円		

経営・技術の特色

○健康で安全な牛肉の生産

牛の個体管理については、1 頭につき 1 人の担当を決めており、毎日状態の確認を行っている。オフィスには過去数年分の子牛管理表を掲示し、ワクチンや去勢を行っているか状態が一目で把握できるようにしている。牛の状態で、気になる様子があれば直ぐに獣医師に診てもらい、その治療の記録は保管している。牛房の枠には、作業者の誰もが分かるようにテープを貼り、記入することで、子牛の系統管理をしている。

水は地下水をくみ上げ、いつも清涼な水を与えており、飼料についてもトレサビリティーを徹底しており、牛の健康を第一に考え安心・安全で美味しい牛肉を生産している。

(有)小田切牧場は、信州あんしん農産物生産認定農場であり、長野県が独自に定めたおいしさ基準(サシ(脂肪交雑)の入り具合と「香り・口溶け」に影響するオレイン酸含有率)を満たす安全・安心でおいしい牛肉である「信州プレミアム牛肉」の生産・販売を行っており、本人は「信州プレミアム牛肉生産者協議会」の会長を務めている。

○循環型農業への取り組み

自然のサイクルに沿い、地域農村と協力し、昔ながらの「循環型農業」にこだわり実践している。

平成31年 出生子牛(黒・ET)

耳標	生年月日	性別	ワタシ (2018年)	主勢 (2018年)
1667	31. 4. 13	♀	○	○
1668	4. 15	♀	○	○
4200 (2018)	4. 24	♀	○	○
1669	5. 1	♀	○	○
1670	5. 18	♀	○	○
0501 (2018)	6. 5	♀	○	○
1671	6. 9	♀	○	○
1672	6. 12	♀	○	○
1673	6. 16	♀	○	○
1674	6. 18	♀	○	○
1675	6. 18	♀	○	○
1676	7. 12	♀	○	○
1677	7. 23	♀	○	○
1678	8. 17	♀	○	○

子牛管理表



牛房の枠にテープを貼っている



牛舎内の様子

糞尿は、小田切牧場が構成員として設立した農事組合法人北信たい肥センターでたい肥化处理し、地域の耕種農家に供給するとともに、稲わらとの交換もしており、年間の使用量全てを地域内の農家から調達している。

たい肥利用農家が栽培した米や野菜は、農地の耕作放棄地解消を推進するために設立した農事組合法人えぼし湯の丸高原の直売所のほか、小田切牧場が関係を構築した京都の農産物直売所で販売している。

生産した牛肉は、関連会社であるスーパーの(有)オダギリにおいて販売しているほか、京都の焼肉店及び直売所でも販売している。



農事組合法人北信たい肥センターでたい肥化处理した特性完熟有機肥料

○地域農家との連携

地域の酪農家と連携し、小田切牧場で採卵を行った和牛の受精卵を地域の酪農家ホルスタインに移植し、E T子牛の生産を担ってもらい、生まれた子牛を買い取り、酪農家の所得向上対策にも一役かっている。併せて、繁殖部門を導入し、安定したもと牛調達を行っている。

○農場 HACCP 取得

小田切牧場では、安全・安心でおいしい牛肉生産とともに消費者との信頼構築、衛生管理意識の向上、加えて社員教育を兼ねて農場 HACCP に取り組みたいという意識により、平成 26 年 9 月、農場 HACCP への取り組みを開始。関係機関と協力しながら取り組み、平成 31 年 2 月に農場 HACCP 認証を取得した。11 月には、生産牛肉に農場 HACCP 認証マークの貼付が承認された。

農場 HACCP 認証取得を機に、JGAP 取得も視野に入れている。



農場 HACCP 認証書

耕畜連携の活動

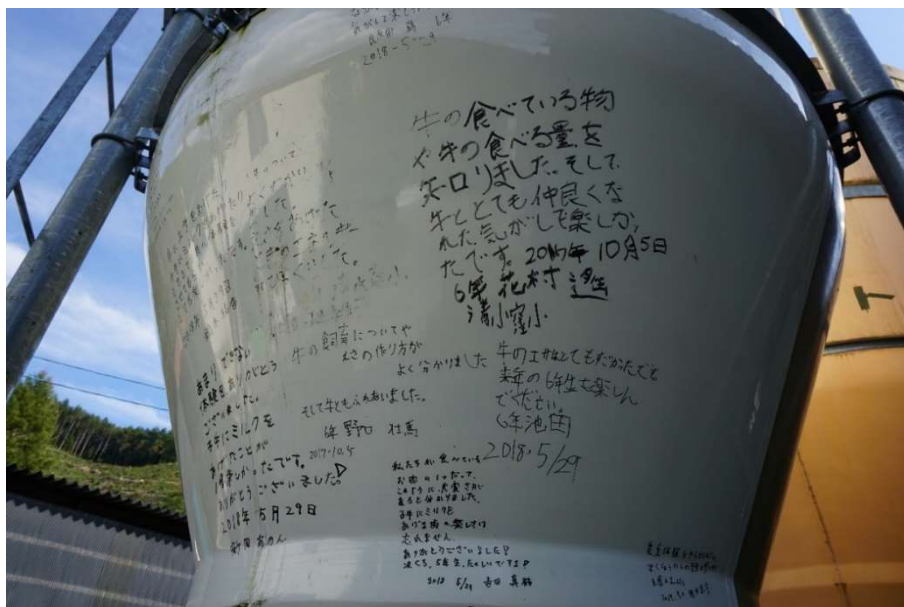
えぼし湯の丸高原は、牧草やトウモロコシ、野菜などを生産しており、牧草は小田切牧場に供給するなどコントラクターとしての役割も担っている。

また、小田切牧場の有機肥料使用者等関係者による限定農産物の生産と販売を行っており、様々な販売活動に参加するとともに地元イベントでの農産物の販売も行っている。

えぼし湯の丸高原の設立により、土地集積ができ、農地の耕作放棄地解消を推進することにより牛の放牧場が確保でき、地域の獣害防止対策にも繋がっている。

地域に対する貢献

農事組合法人北信たい肥センターは、小田切牧場が実質的に運営をしており、たい肥を地域に還元するだけでなく、たい肥を利用した農家の生産物の販売をサポートすることにより、地域の農家との連携を確立している。



体験学習に参加した子供たちのメッセージ

また、都市部小学生の農業体験学習を受け入れるとともに、当地の農産物を食べてもらう仕組みづくりとして、学校給食へ農産物を提供し、農業の大切さを理解醸成する食育の取り組みを行っている。

生活の視点の配慮について

小田切牧場では、障害者や高齢者らの農業分野での就労について、積極的に雇用する体制づくりに尽力している。雇用にあたっては、地域の福祉会の障害者事業所と連携し、4月から12月の間、週1回障害者を受け入れ、えぼし湯の丸高原において、ブロッコリーの苗の植え付け、玉ねぎの収穫作業を行っている。

将来の方向性について

地域と一体的に発展していく経営体として、①地域から認知され、地域に貢献すること、②販売サイドだけ見ているのではなく、存在している地域社会の構成者としての役割を自覚して行動すること、を念頭に置いて地域から愛される牧場を目指す。